

## 橋本宗吉関係の文献リスト

嘉 数 次 人 \*

### 概 要

江戸時代の蘭学者である橋本宗吉(1763～1835)は、大阪ではじめてオランダ語を習得した人物で、蘭学塾「絲漢堂」を開いて多くの弟子を養成したことで知られる。また、エレキテルを中心とした電気の研究でも知られており、日本の電気学の祖とも呼ばれる。しかし、現代に伝わっている資料が少ないこともあって、橋本宗吉に関する研究は盛んとは言い難く、まとまった研究書や伝記の発行もない。その結果、彼のプロフィールや研究の詳細は知られていないことが多い上、これまで行われた研究成果を概観する事も困難な状況となっている。

2013 年は、橋本宗吉の生誕 250 年であった。科学館では、橋本宗吉のプロフィールや、静電気の研究を顕彰するため、『静電気博士になろう ～なにわの静電気博士・橋本宗吉にチャレンジ～』と題した小冊子(ミニブック)を発行した。その際、原稿執筆のために橋本宗吉に関する文献を集め、概観を試みた。そこで本稿では、これまでの橋本宗吉研究のおおまかな流れや、主な文献リストをまとめたので紹介する。

### 1. 橋本宗吉略伝

橋本宗吉は、1763(宝暦 13)年に生まれた。字は伯敏、曇斎と号した。出生地については、大阪と阿波の二説があるが、近年は阿波で生まれ、幼い頃に家族と共に大阪北堀江に移り住んだという説が多い<sup>(1)</sup>。家は貧しく、宗吉は若い頃から傘の紋描き職人として働いて家計を支えたが、もとより記憶力に優れているとして近所でも評判であったという。その才能に目を付けたのが大阪の天文学者間重富と医師小石元俊であった。二人は、オランダから入ってきた新しい科学書に注目していたが、オランダ語が読めなかったため不自由を感じており、オランダ語を理解する人材を養成しようと考えていた。そこで抜擢されたのが橋本宗吉で、間重富らは宗吉に学費や留守宅の生活費などを援助した上で、江戸の大槻玄沢が主宰する蘭学塾「芝蘭堂」に入門させたのである。時に宗吉が 27 歳の頃であったという<sup>(2)</sup>。

宗吉が芝蘭堂でオランダ語を学んだのは4ヶ月という短い期間であったが、その間に4万のオランダ語の単語を記憶したという。さらには、宇田川玄真、稲村三伯、山村才助とともに芝蘭堂の四天王と称されるほどの才

能を発揮している。大槻玄沢もその才能を認め、宗吉が短期間で大阪に帰ることを残念に思ったという。その後、大阪に帰った宗吉は、恩人である間重富や小石元俊の求めに応じて蘭書を翻訳したり、間重富の天体観測助手をつとめたりしながら、自らも医師として開業し、加えて「絲漢堂」という蘭学塾も開き、大阪で最初の蘭学者として活動を開始した。

独立後の宗吉は、精力的に活動を行なった、開業医としても順調だったようで、小石元俊が『三法方典』に寄せた序文によると、宗吉の医院にはたくさんの患者が訪れ、その成果により出版費用を捻出する事が可能になったという<sup>(3)</sup>。

また、蘭学研究においても医学、薬学関係を専門とし、1805(文化2)年に『三法方典』を、1819(文政2)～1823(文政6)年には『西洋医事集成宝函』を出版しているほか、未刊の訳書も多かったようで、『三法方典』の巻末には「橋本宗吉著述」として、『内景洞視』6冊、『ショメール奇法拾輯』4冊、『トーマス解体書』7冊、『西洋産育全書』10 冊、『遠西雜俎』3冊、『西洋天話(附太陽明界七曜彗星運行之図)』3冊、が挙げられている<sup>(4)</sup>。その他、1796(寛政8)年には長久保赤水閱、橋本宗吉製として、世界地図『喁蘭新訳地球全図』が出版されている。

\*大阪市立科学館、中之島科学研究所

その他、橋本宗吉の業績として有名なのはエレキテルを通じた静電気の研究で、1811(文化8)年頃にボイスを翻訳した『エレキテル訳説』と、その成果をもとに一般向けに解説した『エレキテル究理原』を著している。特に後者は出版を計画していたが、何らかの事情で実現せず、写本で伝わるのみである。なお、エレキテルや静電気については、日本でも宗吉以前から知られていたが、科学的な考察を行ったのは宗吉が最初であることから、「日本電気学の祖」とも呼ばれている。

その後、宗吉は65歳になった文政年間末頃から急に目立った活動がなくなり消息も途切れがちになる。その理由は不明であるが、文政年間末に京都・大阪でキリシタン事件が起こり、また江戸ではシーボルト事件が起こったことから幕府による蘭学取り締まりが厳しくなり、活動が制限された事が挙げられている。特に前者に関わっては、弟子の藤田顕蔵が禁制のキリシタン関係資料を自宅に持っていたことが発覚して死罪となっており、宗吉にも大きな影響を与えたとされている。

またその頃、宗吉は安芸国竹原(現在の広島県竹原市)に一時期滞在していたとされる。竹原は、宗吉の娘と結婚して橋本家の養子になった秀平の出身地であり、秀平夫妻はのちに竹原に移り暮らしている土地であったのだが、これは上記の事情により大阪に居づらくなった宗吉が、一時期隠れ住んだのだという。しかし、この件については、異論もあり、詳しいことは不明である<sup>5)</sup>。

宗吉はその後も目立った活動も無く晩年を過ごし、1835(天保7)年、74歳で亡くなっている。

## 2. 橋本宗吉研究小史

橋本宗吉研究を時代順に概観すると、大きく2つの活発期があった。1つめは、明治末から昭和初期にかけての時代で、大槻如電の調査を皮切りに、土屋元作、後藤肅堂、浪岡具雄らが調査を行ない、論文を発表している。また、橋本宗吉の墓が見当たらないということから有志が大阪の念仏寺に墓碑が建て、三崎省三により『エレキテル究理原』の翻刻本が発行されたのもこの時期であった。

その後、1926(大正15)年12月には宗吉の顕彰を目的とした橋本曇齋会が結成され、活動はピークを迎えた。橋本曇齋会は、大阪時事新報の土屋元作が大坂堂島の中央電気倶楽部で橋本宗吉の電気研究に関する講演を行った際、講演によりはじめて宗吉の業績を知ったという電気事業関係者が、彼を顕彰しようと有志を募ったことに始まった。そして、橋本宗吉のエレキテル研究を後世に伝えること、江戸時代の蘭学者たちによるエレキテル研究の資料を集めること、橋本宗吉の事績を明らかにすることを目的とし、電気関係者

のみならず学術研究者らも加えて、幅広い調査に当たった。その成果は、まとまった形で発表されてはいないが、浪岡具雄による講演を活字化した『蘭学者橋本宗吉』(大阪史談会報 第4号 昭和4年8月)は、宗吉の事績を紹介した文献としては非常によくまとめられており、現在でも基本文献の一つとなっている。浪岡具雄は、その後も精力的に研究成果を発表している。さらに、1935(昭和10)年は橋本宗吉没後100年にあたることから、記念事業を行なうことを目的とした「橋本曇齋先生百年記念会」が同年2月に結成され、東京と大阪で講演会と展覧会を行なったほか、『エレキテル究理原』、『エレキテル訳説』の影印本と、『エレキテル究理原』の校訂本を出版している。これ以降、研究は徐々に活発さを失っていったのであるが、現在知られている橋本宗吉のプロフィールは、基本的にこの時期の研究成果であると言っても過言でない。

そして、橋本宗吉研究の2つめのピークは昭和40～50年代頃であり、中野操、宮下三郎らが医学史の立場から、また海野一隆が地理学史の観点から研究を行ない、現存する資料に基づいた詳しい考察が行われている。またこの頃には、『エレキテル究理原』、『三宝法典』の影印本も出版され、基本文献に触れるのが容易となった。

その後、再び研究が少なくなってきたが、近年では東徹が宗吉のエレキテル復刻や『エレキテル究理原』で紹介されている静電気実験のオリジナルを探求するなどの研究をおこなっている。加えて、広島県竹原市の郷土史家らも宗吉研究を行っている。竹原は、宗吉の娘と結婚し橋本家の養子となった秀平の出身地である。秀平はのちに竹原に戻って医師を開業しているし、また宗吉も一時期竹原に滞在したという説もあるなど、宗吉との縁が深い土地であることから、地元ゆかりのある人物として宗吉が研究されており、管脩二郎らによる研究が知られている。

## 4. 橋本宗吉の文献リスト

ここに挙げる橋本宗吉関連の文献リストは、竹内博編著『日本洋学人名事典』(柏書房、1994年)、および谷沢永一、筒井之隆「橋本宗吉」、『なにわ町人学者伝』(潮出版社、1983年)と、東徹『エレキテルの魅力』(裳華房、2007年)に掲載された文献リストをベースに、筆者の管見に入ったものを加えてリストアップしたものである。

### 【論文】

- ・芦田伊人「橋本宗吉著「唎蘭新訳地球全図」に就いて」、『歴史地理』Vol.74 No.5、1939(昭和14)年
- ・鮎川信太郎「橋本宗吉著「唎蘭新訳地球全図」に就

- て 一芦田伊人氏の所論を中心に一』、『歴史地理』Vol.76 No.1、1940(昭和 15)年
- ・鮎川信太郎「橋本宗吉の囑蘭新訳地球全図に対する山村昌永の批判」、日大三中研究年報7、1942(昭和 17)年
  - ・中野操「晩年の橋本宗吉について」、『医譚』復刊38、日本医史学会関西支部、1968(昭和 43)年
  - ・宮下三郎「薬学の先駆医者としての橋本宗吉」、『科学史研究』No.100、1973(昭和 48)年
  - ・宮下三郎「橋本宗吉『西洋産育手術全書』の原著」、大阪府立図書館紀要第9号、1973(昭和 48)年
  - ・布施光男「橋本宗吉の摩擦起電機について」、『科学史研究』No.116、1796(昭和 51)年
  - ・海野一隆「橋本宗吉世界図の異版・偽版・模倣版」、日本地図資料協会編月刊古地図研究百号記念論集『古地図研究』、1978(昭和 53)年
  - ・海野一隆『『囑蘭新訳地球全図』における参考資料一山村昌永の批評との関連において一』、『日本洋学氏の研究 VII』、創元社、1982(昭和 60)年
  - ・菅脩二郎「橋本宗吉について(其の一)」、『竹原春秋一郷土史と民俗一』第 17 号、竹原郷土文化研究会、1979(昭和 54)年
  - ・菅脩二郎「橋本宗吉について(其の二)」、『竹原春秋一郷土史と民俗一』第 18 号、竹原郷土文化研究会、1980(昭和 55)年
- 【伝記、紹介記事等】
- ・大槻如電「橋本宗吉先生」、『中外医事新報』380、日本医史学会、1896(明治 29)年
  - ・後藤肅堂「本邦電気学の祖橋本曇斎」、『歴史地理』Vol.47 No.5~6、1926(大正 15)年
  - ・後藤肅堂「本邦電気界の二祖平賀源内と橋本宗吉」、『中央史談』Vol.12 No.6、1926(大正 15)年
  - ・後藤肅堂「橋本宗吉年譜」、『歴史地理』Vol.47 No.6、1926(大正 15)年
  - ・土屋元作「エレキテルの先駆 橋本曇斎先生」、『国民史談』Vol.3 No.2、1926(大正 15)年
  - ・後藤肅堂「本邦電気学の鼻祖 橋本曇斎会と其建碑」、『史蹟名勝天然記念物』第1輯 No.8~10、1926(大正 15)年
  - ・浪岡具雄「蘭学者橋本宗吉」、『大阪史談会報』第4号、1929(昭和4)年
  - ・浪岡具雄「曇斎橋本宗吉の晩年について 一何故事績が湮滅したか一」、『古本屋』第8号、1929(昭和 4)年
  - ・浪岡具雄「橋本宗吉の韜晦事情」、『大阪史談会報』第5号、1930(昭和5)年
  - ・鮎沢信太郎『橋本宗吉とその地球図』、日本大学新聞 328、1930(昭和5)年
  - ・浪岡具雄「橋本曇斎伝補遺雑考」、『大阪史談会報』、第3巻 第3号、1934(昭和9)年
  - ・浪岡具雄「贈正五位 橋本宗吉先生」、『上方』第117号、1940(昭和 15)年
  - ・中野操「大阪における蘭学の祖・橋本宗吉」、『大阪医学風土記』、杏林温故会、1959(昭和 34)年
  - ・中野操「私の医人伝 一橋本宗吉」、『クリニック・マネジメント』14、1976(昭和 51)年
  - ・中野操『大阪蘭学史話』、思文閣出版、昭和 54 年
  - ・谷沢永一、筒井之隆「橋本宗吉」、『なにわ町人学者伝』、潮出版社、1983(昭和 58)年
  - ・吉村正洋「えれきてる事始(上)」、『電子』、Vol.40 No.5、2000(平成 12)年
  - ・吉村正洋「えれきてる事始(下)」、『電子』、Vol.40 No.6、2000(平成 12)年
  - ・東徹「橋本宗吉のエレキテルと佐久間象山の電気治療器の復元」、『物理教育』、Vol.12 No.2、1994(平成6)年
  - ・東徹「エレキテルをめぐる人々」、『物理教育』、Vol.43 No.1、1995(平成7)年
  - ・東徹『エレキテルの魅力』、裳華房、2007(平成 19)年
  - ・大倉宏、嘉数次人『静電気博士になろう 一なにわの静電気博士・橋本宗吉にチャレンジ一』、大阪市立科学館、2014(平成 26)年
- 【翻刻本】
- ・『和蘭始制エレキテル 究理原』(橋本曇斎先生遺稿)、三崎省三編集発行、1925(大正 14)年
  - ・『阿蘭陀始制エレキテル究理原』『エレキテル訳説』曇斎先生百年記念会、1940(昭和 15)年
  - ・『エレキテル訳説』『阿蘭陀始制エレキテル 究理原』、『日本科学古典全書』第6巻、朝日新聞社、1942(昭和 17)年(復刻版は 1978 年)
  - ・『エレキテル全書・遠西奇器述・阿蘭陀始制エレキテル究理原・和蘭奇器(江戸科学古典叢書 11)』、恒和出版、1978(昭和 53)年
  - ・『三方法典』(江戸科学古典叢書 26)、恒和出版、1980(昭和 55)年
- 【その他】
- ・大槻如電『新撰洋学年表』、1927(昭和 2)年。1963(昭和 38)年に、柏林社書店から再版
  - ・橋本曇斎先生百年記念会編『橋本曇斎先生関係資料展覧会出品目録』大阪府立図書館、1935(昭和 10)年
  - ・長濱重磨『えれきてる物語』、河出書房、1943(昭和 18)年

- ・渡辺敏夫『間重富とその一家』山口書店、1943(昭和18)年
- ・有坂隆道「大阪の洋学 くその勃興期の様相」、『日本洋学史の研究 I』、創元社、1968(昭和43)年
- ・小山正栄『えれきてる物語 一日本電気研究者列伝一』、九州電力、1970(昭和45)年
- ・松田清「単語帳からみた大坂の蘭学」、『大坂が見た「異国」』-オランダからの風-』、大阪府立中之島図書館、1997(平成9)年
- ・竹内博編著『日本洋学人名事典』、柏書房、1994(平成6)年

## 5. おわりに

以上、橋本宗吉に関する文献を一覧した。ここに挙げたものは、筆者の管見に入ったものに限られており、残念ながら全てを網羅できてはいないが、橋本宗吉を研究する場合には、ある程度役立つものと考えている。

橋本宗吉に関しては、近年は研究があまり行われていないため、参考となる文献の多くは発表から40年以上経っており、入手や閲覧にも手間がかかるようになってきている。今後、研究が再び活発に行われることを望む限りである。

## 註

(1)橋本宗吉の出生地については、例えば浪岡具雄は、根拠となる明確な資料がないとしたうえで、大阪で生まれたとしていた(浪岡具雄「蘭学者橋本宗吉」、『大阪史談会報』第4号、1929年、179ページ)。しかしその後、宗吉の祖父丹治兵衛の代まで阿波におり、父伊平の代になって若い宗吉を連れて大阪に出てきたのであろうという修正説を出して

いるが、浪岡はこれも憶測に過ぎないと断っている(浪岡具雄「橋本曇斎伝補遺雑考」、『大阪史談会報』、第3巻 第3号、1934(昭和9)年、16ページ)。その後は、阿波を出身とする書が多い。

- (2)橋本宗吉の芝蘭堂入門時期については、具体的な資料がなく不明である。大槻玄沢は、『三方法典』に寄せた序文において、橋本宗吉が江戸に来たのを「距今寔十四五五年」(大阪歴史博物館所蔵本、第一丁オモテ)と書いている。序文には文化元(1804)年とあるから、逆算すると寛政元(1789)年か同2(1790)年になる。また、杉田玄白も、『蘭学事始』において「江戸へ來りしは寛政の初年のことなり」(緒方富雄校註『蘭学事始』、岩波文庫 5095、1959年、50ページ)としている。
- (3)『三法方典』の西説三法方典序(小石元俊序文)に「今茲享和二年春所自訳西医縛武得而反数所著三法方典業成全部六卷以来余之再四於是乎積書而嘆曰是医家必用之書也蓋上木焉生乃拜曰先生今賜是褒獎之言足以忌嚮者翻譯刻苦咽塞致咯血之勞也因歸無幾何而生之術大行戶外之履滿以得彫口之資於是乎刻遂成焉」とある(大阪歴史博物館所蔵本、第一冊、第5丁オモテ～5丁ウラ)。
- (4)『三宝法典』(江戸科学古典叢書 26)、恒和出版、1980年、574ページ
- (5)橋本宗吉が竹原に一時期移ったという説とその事情については、浪岡具雄「蘭学者橋本宗吉」、『大阪史談会報』第4号、1929年、177～209ページや、浪岡具雄「橋本宗吉の韜晦事情」、『大阪史談会報』第5号、1930年、246～249ページなどに詳しい。また、その後の研究としては、中野操「晩年の橋本宗吉について」、『医譚』復刊 38、1968年、3～10ページ、がある。